

中東イスラーム研究拠点

基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」主催

研究会「中央アジアにおけるチャガタイ語・ペルシア語2言語使用」

平成 23 年 3 月 17 日（木曜日）17:30～19:00 東京外国語大学本郷サテライト 801 室

“From Persian Poetic Classicism to Timurid Mannerism: Persian-Chaghatay (Turkic)
Bilingualism in the Intellectual Circles of Central Asia (1475-1900)”

Aftandil Erkinov (Tashkent State University of Oriental Studies)

15～19 世紀にかけて、中央アジアではペルシア語とチャガタイ＝トルコ語の両方がさまざまな場面で用いられた。本報告は、特に、バヤーズ bayāz と呼ばれる詩選集 52 作品の分析により、文学語の変遷について論じるものであった。バヤーズは個人が自分の好みに応じて、あるいは注文主のために好まれる詩を集めたものである。それぞれが孤写本であり、当時の人々の文学的嗜好を示すものとして、極めて重要な文献である。

15 世紀から 18 世紀に編纂されたバヤーズ 12 作品においてはペルシア語の詩が圧倒的であり、チャガタイ語の詩は極めて少ない。取り上げられる詩人は、ジャーミー、ハーフィズ、アミール・フスラウ、サアディーなどのペルシア文学の古典詩人が主であった。その意味で、ペルシア詩古典主義の時代といえることができる。これに対して、19 世紀に入るとチャガタイ語詩の含まれたバヤーズが顕著になる。コーカンド・ハーン国で編纂された『詩人集成』(1821)においてチャガタイ詩の占める割合は 31%、パリ国立図書館所蔵の別のバヤーズ(1836)で 50%、そしてヒヴァ・ハーン国で編纂された『フィールーズシャーの詩人集成』(1907-8)では 100%を占めることになる。

このようなチャガタイ語の文学語としての台頭は、君主の政治的意図によるものと考えられる。すなわち、これらチャガタイ詩を振興した君主たちは、ティムール朝のフサイン・バイカラの宮廷とそこで活躍した文人政治家ナヴァーイーを理想としており、彼らの詩を模倣した。そして君主の詩をさらに模倣するよう宮廷詩人に命じ、それをあわせてバヤーズを編纂させたのである。これは、ティムール様式主義というべきものであり、文学語のペルシア語からチャガタイ語への移行は、特に政治的理由から好まれたティムール朝期の模倣によって、達成されたのである。

(文責・近藤信彰)